

平成
駅前
旅館

前川
麻子
作

登場人物

たぬきやホテル

平井 (フロント係社員)

龍 昇

富田 (フロント係社員)

富澤 力

永作 (フロント係社員)

藍原直樹

浅間 (ルーム係社員)

浅野千鶴

畠 (ルーム係アルバイト)

畑山佳美

下山 (経理部社員)

前川麻子

吉川 (支配人代理)

吉田重幸

客

根岸

根本和史

根岸の妻・昭子

桜井昭子

根岸の娘・真知子

関根麻帆

韓国人・中国人・ドイツ人、ほか

中村榮美子

タイ人・ロシア人、ほか

よこやまよしひろ

パキスタン人

塩野谷正幸

業者

石原マッサージ

ひらたようこ

中野警察署警備課 横曲

よこやまよしひろ

警視庁公安部係長 畠山

畑山佳美

革マル派党員 クロサワ

中村榮美子

1

たぬきやホテル

東京・中野駅前にある創業四十五年の【たぬき
やホテル】。

場面には、

- ・フロントカウンターと、その背後をカーテンで
仕切ったバックヤード、ソファのあるロビー
 - ・ストックルーム、エレベーターなどの狭い空間
 - ・客室内
- の三種がある。

ロビーのソファでコーヒーを飲みながら新聞を讀んで
いる支配人代理の吉川。

フロントカウンターには富田がいるが、身長が小さくて
鼻から上しか見えない。

カウンター裏手のカーテンを開けて、平井が来る。

富田の背後に立つ平井。

二人とも何もせず、ただぼーっとしている。

静寂の中、表を通るサイレン、街宣車などの雑音が時折
聞こえてくる。

吉川 平井さん」

平井 ああ？」

吉川 変わるうか」

平井 「いや、いいよ」

吉川 少し休んだら？」

平井 そう？」

吉川がソファから立つと、平井が変わってソファに座る。

富田、ちらっと吉川を見るが、何も言わない。

表の雑踏が薄く聞こえている。

長閑。

吉川 なんか、懐かしいなあ、この景色」

平井 そう？」

吉川 変な話だけどき、時々、カウンターでチェックイン業務やりたくなったりするんだよね」

平井 だかだか半年くらいじゃない」

吉川 俺、ガラじゃないよ、支配人なんて」

平井 「……」

吉川 「一日中ぶらぶらして、煩いこと言うばっかりでさ」

平井 「うーんなど曖昧な唸り声」

吉川 あれかね、年取ると、やっぱそうなたちやうのかね。自分にとれほどやる気があってもさ。支配人なんて閑職だよ。会社で言えば窓際じゃない」

平井 よっちゃん」

吉川 ん？」

平井 支配人じゃなくて、支配人代理だから」

吉川 わかってるよ」

平井 なに、支配人支配人って、出世でもしたみたい感慨深げにさあ。代理だからね、代理、一時的な代理」

吉川、巡回表を手にして、カウンターから出る。

吉川 「小さい声で」 口惜しいんだろ」

平井 「小さい声で」 口惜しくないよ」

エレベーターからルーム係の浅間が来る。

浅間 ちよっとさあ」

浅間、手にした紙を振りかざして、カウンターに向かってくる。

浅間 「誰もいないバックヤードに向かって」今日の清掃指示表作ったの、誰」

富田 あっ、えーと」

浅間、カウンターまで来るが富田に気づかない。

浅間 なにもう、誰もいないの」

カウンターにあるベルをちんちん鳴らす。

富田 あ、います」

浅間 「吉川に向き直って」ねえ、よっちゃん」

吉川 「浅間を向いて」どした」

浅間 「この指示表、見てよ、ちよっと」

吉川 「指示表を覗きこむ」どれ」

浅間 「ごめんごめん、よっちゃんじゃわかんないか」

富田 あ、それは平井さんが」

浅間 「富田に気づかないまま」 こういう適当なことするの絶
対平井さんだから」

吉川 まあ、適当なことするのは平井さんだろうね」

浅間 畠さんてさ、ほら先週入った子いるでしょ、こんな指示
表じゃできないって」

吉川 言っとくよ」

富田 言っときます」

浅間 あとさ、13時インの部屋、レイトアウト入れないで欲
しいんだよね」

吉川 言っとく、言っとく」

浅間 満室ならともかく、どうせ空いてるんだからさ」

浅間、文句を言いながら来た方へ去る。

平井 「舌打ちして」 レイトアウトだろうが13時インに間に
合わせてセットするのが仕事だろって」

富田 気をつけます。すみません」

吉川 「富田に気づく」 あ、いたんだ」

富田 「いました」

吉川 「ルームの新しい人、どう？」

富田 あ、はい。いい感じですよ」

吉川 浅間さんもなあ、新人に仕事教えるとき、いつつもぴり
ぴりするからなあ」

富田 ほう」

吉川 気持ちわかるんだけどさ」

富田 ほう」

吉川 あれ？ 永作くんは飯休憩？」

富田 「いえ、故障部屋の修理に」

平井 永道の修理」

吉川 永作くんで大丈夫？」

平井 やらせなきゃ覚えないだろ」

富田 自分も、そうでした」

吉川 そうそう」

富田 「このフロントは左官工みたいなものだからって、平井
さんが」

平井 「ここじゃチェックインより故障の方が多からさ」

富田 ほう」

吉川 あれだね、老舗のラーメン屋みたいなものだよね。創業
四十五年、手入れは一切していません、秘伝の職人技で

継ぎ足し継ぎ足し伝統を守ってます、ってさ」

三人、ゆるゆると笑う。

富田 昨日は、」

平井 「しかし、こうガタついてちゃ、オリンピックまで保つか
わからんぞ」

富田 「4階の天井が落ちて」

吉川 天井？」

富田 ほい」

吉川 「こないだも4階だったよね」

平井 「こないだは401」

吉川 また落ちたんだ」

富田 昨日は407が」

吉川 両端かあ」

富田 明日は405かもしれません」

平井 そうね、最後に真ん中って感じでね」

富田 「5階から8階まではまだいくつか売れる部屋があるんで、
開けてましたけど、4階が崩れると、多分」

平井 そりゃまあ、その上も全部あれだよなあ」

富田 怒のため、4階から上は全部売り止めにしてます」

吉川 倒壊だ」

平井 水道直してる場合じゃないよ、よっちゃん」

富田 水回りの配管のどっかが漏れて腐ってきてるんじゃないかって」

平井 まあ、そういうことだろうなあ」

富田 夜、巡回していると、ぴしっ、ぴしっって音が聞こえます」

吉川 どこから」

富田 建物全体から」

吉川 怖いね」

富田 馴れました」

平井 天きい地震とか来たらダメだろうな」

富田 震度2でも、ドアが開かなくなります」

吉川 ちょっと、巡回してくる」

富田が吉川に鍵を渡す。

富田 「4階から上には行かないでください」

吉川 そういうわけにはいかないだろ、巡回なんだから」

富田 歩き回ると、床が抜けるかもしれないんで」

吉川、鍵を持って大きなため息。

平井 あ、よっちゃん、よっちゃん」

平井、バックヤードからヘルメットを出して、吉川に差し出す。

平井 「これ貸すから」

吉川、情けない顔で受け取り、しげしげとヘルメットを見る。

吉川 「この、なんか刻んであるの、なに？」

平井 ああ、それは、怪我で退職した歴代の夜勤バイトの名前」

吉川 そうか・・・ 可哀想にな・・・ (ヘルメットを撫でる)」

吉川、覚悟を決めた顔で、ヘルメットを被り、エレベーターに乗り込む。

平井 ちよっと脅かし過ぎたかなあ」

富田 倒壊寸前なのは事実ですから」

平井 やばいやばいって言いながら倒壊寸前のまんまでずっと営業してきてるんだからさ。今すぐ崩れ落ちるってこともないだろ」

富田 「……」

平井 あれだよな、就職るときとか、御社に骨を埋める覚悟って言うけどさ、ここじゃほんとにそうなっちゃうよな」

富田 采月、消防署の検査があります」

平井 消防署は大丈夫だよ。非常口の前片付けておけば、天井裏見るわけじゃないからさ。去年だつてさ、屋上の看板、固定してる器具が古くなってるだろ、落下したら危ないからって地元の商店会の連中に言われてさ、新しいのに交換したじゃん」

富田 「二回り小さくなりましたよね」

ルーム係の浅間とバイトの畠がエレベーターから降りて来る。

平井、「お疲れ様」と声をかける。

畠 「浅間に」あの、今日、時間かかっちゃって、すみませ
んでした」

浅間 馴れてくると、誰の指示表を無視して誰の指示表を信用
すればいいか、わかるから」

畠 ほう」

浅間 最初のうちは、賭けみたいなものだからさ」

畠 賭けですか」

浅間 畠さん、今日、指示表にない部屋、何度か入ってたけど」

畠 すみません。一応チェックとかしたほうがいいのかなっ
て思ってた」

浅間 まあ、しょうがないか。平井さんの指示表だったもんね」

畠 気をつけます」

浅間 ちよっと一服してくる」

畠 あ、どうぞ」

外に出て行こうとする浅間を、平井が呼び止める。

平井 あ、浅間さん」

浅間 あれ、平井さん、いつからいた？」

平井 うん。ずっと」

浅間 あ、そう。お疲れ様です」

浅間、表にタバコを吸いに出て行く。

平井、追うのを諦めて、バックヤードに入る。

畠、ロビーのソファーに腰掛け、ノートを取り出す。

富田、カウンターから出てきて、畠に缶コーヒーを差し出す。

富田 「これ、良かったら」

畠 えっ、どこにいたんですか」

富田 カウンターに」

畠 すみません、気が付かなくて」

富田 「いえ」

畠 あ、これ、もらっていいんですか」

富田 どうぞ。自販機が詰まって取り出したやつなんで」

畠 あ、の、じゃ、お金払いますから」

富田 「いいんです、なんか、昨日泊まってたお客さんが、100円入れたら10本くらい出てきたからって、3本返してくれました」

客がくる。大きな買い物袋や家電の箱をいくつも抱えた中国人女性。

富田がカウンターに戻り、チェックインの手続きをする。

←以下チェックインの手続きは同じ流れで繰り返されます。

・客に宿泊予約名を訊く、もしくは客がバウチャーと呼ばれる予約票を出す。

・手元にある予約台帳で予約の確認をする。

(△△◎◎さま、シングルルームご一泊素泊まりで承っております)

・外国人であればパスポートの提出を求め、宿泊カードに記入してもらう。その間にバックヤードでパスポートのコピーを取る。

(お手数ですがこちらにお名前・ご住所・お電話番号のご記入をお願い致します)

・宿泊料金の支払いを求める。

(本日のご宿泊料金は7400円でございます)

・代金を受け取って、領収書と部屋の鍵を渡す。

(2階の206号室をお使いください。外出されるときには鍵をフロントにお預けください。チェックアウト)

トは明日の午前10時です)

(ありがとうございます。ごゆっくりどうぞ)

中国人の女性客、四苦八苦してエレベーターに乗り込む。

畠 「カウンターにいる富田に」 7本飲んだんですね

富田 えっ

畠 その、(飲んでいた缶コーヒーを指して) これ買ったお客さん

富田 ああ

畠 7本飲んだんだ

富田 ひっくりしたって言ってました

畠 ひっくりしますね

富田 自販機もボロいんで

畠 ギービスですって、言えばよかったのに

富田 ギービスですか

畠 なんか、今日半日働いただけで、あんまりにもみんながボロいボロいって言うから、思ったんですけど

畠 お湯が吹き出したり、トイレが逆流したりすることもあ
るって聞きましたけど

富田 ほしい」

畠 そういうのも、当館自慢のアトラクションでございます
って言えばいいんですよ」

富田 でも、ネズミとかも出るし」

畠 今、横切ったのが当館の人気キャラクターでございます
って」

浅間が戻り、バックヤードに入ろうとして足を留め、

浅間 そういやさ、なんか、改装するって話もあるんだよね」

畠 そうなんですか」

富田 修理が追っつかないから」

畠 そうかあ」

浅間 改装が決まる前に倒壊しそうなんですけど」

畠 改装したら、今どきのちゃらちゃらしたシティホテルみ
たいになっちゃいそうですね、立地いいし」

浅間 そうなんじゃない。なんだかんだそういうの方が安上
がりらしいから」

畠 あの、浅間さんによっちゃんて紹介されてお名前まだ何
ってないんですけど、よっちゃんて方が、ここの支配人

なんですよね」

浅間 「うそ、よっちゃんて支配人なの？」

富田 あ、吉川さんは、支配人代理ですね」

畠 ああ、吉川さん」

富田 支配人、糖尿病で入院してるんで、一番長く働いてる吉川さんが、一時的に」

畠 そうなんだ」

浅間 だよねえ」

富田 吉川さんと平井さんが、一番古い社員です」

畠 「熱心にメモをしている」

浅間 「もともと、レストランの支配人だったんだよね」

畠 「レストラン」

富田 前は、レストランが併設されてて」

浅間 「いつ閉めたんだっけ」

富田 平年くらい前です」

浅間 そうだっけ。レストランなんて最初からなかった気がする」

富田 ありましたよ」

畠 じゃあ、吉川さんは、それから支配人代理に？」

富田 そうですね。レストランの支配人だったんで」

客がくる。派手な柄のシャツを着たタイ人男性。

富田、チェックインの手続きを始める。

浅間　なんか、気が遠くなるよね。わたしなんかここ入ってまだ2年だけどさ、平井さんとかよっちゃんとか30年もここににいるわけでしょ・・・どうよ？」

畠　よっぽど居心地がいいんですね」

浅間　その割にはぶうたれてばかりだよ。給料日前になると、俺もう今月でやめるからさ、って毎月言ってるもん」

畠　それで30年かあ」

浅間　もう、ここの備品みたいなもんだよね」

鍵を受け取ったタイ人の男性客、ソファアに腰を下ろして畠をじろじろ見る。

視線が合ったら話しかけようとしているらしいが、畠は気がつかない。

富田　やっぱり改装するしかないですよ。天井落ちるし」

畠　いいじゃないですか、サプライズイベントで」

富田 「お客さんが怪我とかしたら」

畠 体験型アトラクションでことぞ

富田 そうか」

畠 なんてね。そうはいかないんでしようけど」

富田 「……」

タイ人の男性客、ポケットから黒っぽい手帳のようなものを出して、どうにか畠の視界に入れようとするが、畠はまったく気づかない。

浅間、ずっと畠の注目をひこうとしているタイ人男性に気づき、不審そうに見ている。

畠 おたしサービズ業に憧れがあるんですよね。ここ、いい

ですよ。確かにボロいけど、常連さんばかりでしょ。

みんな、ここファンなんだと思いますよ」

富田 畠さん、ルーム清掃より、フロントの方が向いてるんじ

やないですか」

畠 無理ですよ、ブスだし」

タイ人男性、浅間の視線に気づいて、ソファを立ち、

エレベーターに向かう。

浅間 今のお客さん、タイ人でしょ」

富田 はい」

浅間 やっぱ、長い、名前」

富田 えーと、(宿泊カードを見る) パッタマポラクルチャイ
さんです」

浅間 長いね」

富田 あ、でも長くて書くのが大変だからtを一つ減らして
るって」

浅間 天して変わんないよ」

Tシャツにたくし上げたストラックスで長靴、ねじり鉢巻
姿の永作がバケツを持って戻ってくる。

永作 だめだ、もうあの部屋」

富田 ダメですか」

永作 全然ダメ」

富田 売り止めですね」

永作 ちよっと今日は売れる状態じゃないですね」

平井がバックヤードから顔を出す。

平井 「それよりさ」

浅間 「売り止めしてくれればこっちは仕事が楽になるからいいけどね」

畠 「(永作に) お疲れ様です」

永作 「ホテルマンがこんな肉体労働とは思わなかったなあ」

平井 「永作くん、」

タイ人の男性客がエレベーターから降りてくる。

畠 「おたしも、フロントが左官工までやるとは知りませんでした」

永作 「ないですよ、ないない、普通」

平井 「永作くん」

タイ人男性、カウンターの前に立ち止まって、また畠を見ている。

富田 「客に」 お出かけですか」

タイ人、富田に気づかず、こそこそ畠を呼び止めようとして
している。

その様子に気づいた浅間、激しく不審そうにタイ人を見
ているが、タイ人は気づかない。

平井 永作くん、このシュレッダー、なんとかしてよ」

永作 シュレッダーですか」

平井 すぐ詰まっちゃうんだよ」

永作 どうせいつぺんに5枚も6枚も突っ込んでるんでしょ」

フロントの電話が鳴る。

富田が出る。

富田 ありがとうございます。たぬきやホテルでございます」

浅間、カウンター前から動かないタイ人に露骨に不審顔
を向け、声をかける。

浅間 「エクスキューズ・ミー、サー？　メイ・アイ・ヘルプ・ユー？」

タイ人、驚いて身を退くが、にこにこしながらタイ語で何やら言い訳をしながら、出かけようとする。

電話応対中の富田が見答める。

富田 「受話器を手で覆って、タイ人に）あ、すみません、ミスター、えーと、ミスター・パッタマポラクルチャイ、パッタマポラクルチャイさん、お部屋の鍵を」

タイ人、にこにこしながら逃げるように出て行く。

富田 あー」

富田、電話に　申し訳ありません、少々お待ちください」と言っって、カウンターを飛び出し、タイ人を追いかけて行く。

永作 ほら、壊れちゃったじゃないですか、こないだ買ったば

っかりなんだから、ちゃんと使ったあとに手入れしてくださいよ」

平井 めんどくさいだろ」

永作 めんどくさくても」

浅間、保留にしてある電話の受話器を取って、通話状態にすると、

浅間 満室です」

と一言言い放って電話を切る。

バックヤードから永作と平井が顔を出し、

永作 あれ、富田くんは？」

畠 あ、なんかお客さんが鍵持って出かけちゃって、追いかけて行きました」

客が来る。

顔に包帯をぐるぐる巻にした韓国女性。

永作が対応する。

古い宿泊カードの束とゴミ袋を抱えていた平井、ロビーに出て、ゴミ袋を広げ、紙を一枚一枚手で千切ってゴミ袋に捨て始める。

畠 手伝いましょうか」

平井 悪いね」

畠 「いえいえ」

平井 個人情報だからさ」

浅野 買いなよ、シュレッダー」

カウンター前で、永作が客から受け取ったパスポートを開いて、目の前の客の顔と何度も見比べ、

永作 アイ・キャン・ノット・チェック・ユア・フェイス」

韓国女性が渋々顔の包帯を解き始める。

だが、包帯を解いても、両まぶたの上と鼻梁と下唇に大きなガーゼを当てていて、顔の全容は不明。

永作 ええー」

苦い顔で疑いの目を向ける永作に、とうとう韓国女性客がキレて、韓国語で何やら苦情をまくし立てる。

永作　ほいはいはいはい

永作、仕方なくパスポートを返してルームキーを渡す。

永作　〔笑顔で〕ありがとうございます。ごゆっくりどうぞ

韓国人女性客、奪うようにキーを取り、大声で文句を言
いながらエレベーターに乗り込む。
皆、啞然と見送る。

浅間　整形だ

永作　ですよね

平井　ああ、整形か

畠　日本人が韓国で整形して、パスポートチェックにひっかかるパターンも多いんですよ

永作　そのうち、パスポートも写真じゃなくて指紋認証とか、

目玉の虹彩認証とかになるんだよ、きっと」

畠　ぞうなったら偽造も手が込んでくるんでしょうね」

永作　ほら、平井さん、あの人、知ってますよね、月一くら

いで休憩で来る、ほら、背の高い、水球の選手みたいな」

平井　ああ、いるねえ」

永作　ね、背の高い」

平井　背の高い人だよ」

永作　うん、そう。背の高い、ね」

平井　ぞうそう、いるいる。」

永作　ね」

平井　背が高いんだよ」

永作　ですよね。それであの人、」

平井　(畠に)でもパスポートってあれだろ、」

永作　(ええー)」

浅間　(永作に自分の胸を叩いて見せる)聞いているから」

永作　「・・・その人がね、ちょっと特殊な人で、チェックインす

るときは男の人なんだけど、チェックアウトするときは

女の人なんだよね」

浅間　(菩薩の微笑みで頷く)」

永作　あとほら、スクール水着の」

平井 ああ、いたなあ、スクール水着」

畠 「スクール水着ですか」

平井 そうそう、おじさん」

浅間 おじさん？」

永作 そうそう、おじさんなんだよ（げらげら笑う）」

浅間 （笑顔で）なに、スクール水着のおじさんて」

永作 （浅間に）教えない」

浅間 「間髪入れず永作にビンタする）」

永作 「！（叩かれた頬に手を当てて）」

平井、畠も凍りつく。

浅間 （笑顔で）なに、スクール水着のおじさんて」

平井 「いや、別に大したことじゃないんだけどさ、」

永作 「頬に手を当てたまま）教えるもんか！」

永作、叫んで走り去る。

追いかけて走り去る浅間。

見送る平井と畠。

畠 「見送ったまま、したり顔で」あの二人、付き合ってるんだ」

平井 「……（感心する）付き合ってるのか」

汗みどろの富田が息も荒く戻ってくる。

平井 「お」

富田、ぜえぜえと肩で息をしながらも、カウンターに入る。ロビーに激しい鼻息が響く。

平井 「どした、富田」

富田 「どん！とカウンターを拳で叩く」

畠 「あ、あの鍵持って出かけちゃったお客さんですよね」

富田 「どん！どん！」

平井 「チェックインしたばかりだろ、だいじよぶだって。飯でも食いに行ったんだよ」

逃げたはずのタイ人男性客にそっくりなロシア人の客がくる。

平井 「客に）いらっしやいませ」

富田 「猛烈に口惜しそう）逃げられました！（むしろ半泣き）」

平井 「なんだよ、犯人取り逃がした刑事みたいだな」

パスポートを出そうとしていたロシア人客、ぎよっとして身を固める。

畠もびくくっとして固まっている。

平井 「客に）えーあー、バウチャーありますか、バウチャー」

ロシア人に扮した公安の横曲、潜入している婦警の畑山に必死に合図を送っているが、畑山は動揺を誤魔化すように紙を千切りまくっていて横曲に気づかない。

カウンターの途中で頭を抱えている富田に代わって平井がカウンターに入る。

平井 「えーと、じゃあ、パスポートありますか、パスポート」

横曲、畑山に目を向けたまま胸ポケットからパスポート

を出す、パスポートのつもりが黒っぽい手帳。

平井 あー、これだめ、パスポート、パスポート」

平井は気づかないが、横曲は自分が間違えたことに気づき慌てて手帳を引っ込める。

あちこちまさぐってパスポートを探している横曲に、富永が気づく。

富田 あ」

横曲、びくっと顔を上げるがすぐに伏せ、

横曲 「ニエート・エータ・ニエ・ターク・・・」

「いいえ、ちがいます」とロシア語で呟くと、隙をついて逃げる。

富田 またかよ！」

カウンターを飛び出して追いかけて行く富田。

平井 「富田を見送って、畠山に」…… まあ、ここはいろんな客が来るよね」

何かじっと考えていた様子の畠山、決意したふう顔に顔を上げ、

畠山 平井さん、ちょっとお尋ねしたいことがあるんです」

平井 ん？ ああ…… スクール水着おじさんか」

畠山 ちがいます」

畠山、黒っぽい手帳のようなものから、写真を取り出す。

畠山 平井さん、この写真の」

畠山の言葉をかき消すようにフロントの電話が鳴る。

平井 「電話に出る」ありがとうございます、たぬきやホテルでございませす」

客が来る。ドイツ人の女性客。

畠山、その顔を見て、はっとなる。

平井

〔受話器を押さえて〕 いらっしやいませ。（受話器に向かつて） 申し訳ありません、少々お待ちください」

畠山、手元の写真とフロントにいるドイツ人の女性客をこっそり見比べている。

富田がさっきより更に激しい呼吸で戻ってくる。

平井、 富田、外線 1 番出て」と、電話の応対をするよう富田に指示をし、ドイツ人女性客のチェックイン手続きを始める。

富田、猛烈な鼻息のままカウンターに入り、電話を取る。

富田 天変お待たせいたしました。ご宿泊のご予約ですね」

と、話しているつもりだが、息が荒くて 「んふっ」 あふう」とおかしな声が出てしまい、変態電話のよう。

富田 それでは(あふつ)チェック(うふつ)インの(おほつ)お日
(いひつ)にちを、(切られた)………」

富田、黙って電話を切る。

平井が手続きをしたドイツ人女性、ダンケシェーン」
と愛想良く鍵を受け取って、エレベーターに乗り込む。
畠山、こそこそと後を追って、戻ってきたエレベーター
に乗り込む。

平井 「富田に)あれだよな、さっきの包帯お化けの韓国人みた
いなさ、整形で顔だけ綺麗にしてたってさ、愛嬌がなき
やブスに見えるもんだよな」

富田 「………」

平井 ああ、実家のお母さん、具合どう」

富田 「も(も)も(も)何か言う)」

平井 よくないの？ 認知症」

富田 「………」

平井 親父さんいないし、一人息子だろ。実家、帰らなきやな
らないんじゃないのか」

富田 「……人手が足りないじゃないですか」

平井 入手って、ここのこと？」

富田 吾川さん支配人代理にしちゃうくらい、人手足りてないのに、辞められません」

平井 「…お前、そんなこと言っていると、倒壊して骨埋めることになるぞ」

富田 「……………」

平井 「もうちょっと稼ぎのいい仕事に転職してさ、嫁もらって、実家戻って、おふくろさんの面倒見ろよ」

富田 そりゃ、まあ、いろいろ気にはかけてますけど」

平井 それがよくないんだよ。気にかかることそのままにしとくのがさ。気になることにはちゃんと向き合っさつさと解決しないと、他のことまでグズグズになるからさ」

富田 ほう」

平井 富田、まだ若いんだから」

富田 「……………」

平井 「いくつだったけ？」

富田 四十です」

平井 「……………」

カウンターの二人、無言。

平井 まあ、四十じゃもう色々難しいな」

富田 ほしい」

平井 ま、でも、転職は無理でも嫁くらい貰えるだろ、美人とか育ちのいいお嬢さんとかは無理でもさ、ブスだって、自分の嫁になればカワイイもんだって言うじゃない」

富田 「. . . .」

平井 なんてな、うちの嫁は美人だからほんとかどうか知らんけどさ」

富田 ブスでいいです」

平井 「いくら介護のこと考えた結婚だって、やっぱりブスはいいらないよな」

畠山がエレベーターから降りてくる。

富田 ブスがいいんです」

平井 あ、なに、富田くん、ブス専だっけ」

富田 むしろ、ブスが」

平井 あ、そう。それならまだいくらでもチャンスあるんじゃない？」

富田 「……………」

平井 「いやあ、そっか、富田くん、ブス専か。まあ、世の中つてのはうまくできてるんだなあ」

富田 奥さん、美人なんですか」

平井 え、うち？ うちのは、うん、美人よ。まあ、美人だった、っていうかね、うん、過去形だけでもね」

フロントの外線電話が鳴る。

平井、受話器を取るが、耳には当てずにガチャ切りする。

平井 「だるそうなため息」

富田 「何か言いたそうに平井を見る」

平井 うちのフロントにはさ、代々伝わる伝統行事みたいなものがあるんだよ。まあ、あんまり表立って人には言えないうちのフロントにはさ、秘密の伝統行事みたいなソレんだけども

富田 初耳です」

平井 うん。秘密だからさ」

富田 「……………」

平井 「ごこさ、一日の売上、平均してどれくらいかな」

富田 「…五、六十万ですかね」

平井 だよな。毎朝、経理の下山さんが金庫から持ってって、
チェックして銀行に入金してるんだよな」

富田 「そうですね」

平井 「その金をさ」

富田 「……」

平井 「まあ、うまいこと戴こうって話なんだけども」

富田 「ほ」

平井 「うん」

富田 「秘密の伝統行事？」

平井 「うん」

富田 「……」

平井 「いやいや、違うよ。実際にはやらないよ。というか実際にはできない仕組みになってるからさ。だからね、そこをなんとかうまいことやる手口はないかって考えるのが、代々フロントに伝わる秘密のソレなわけで」

富田 「考えるだけですか」

平井 「だって、うち、暇だろ」

富田 「暇じゃないですよ、それなりに」

平井 「うん、まあ、富田くんは働き者だから忙しいのかもしれないけど、俺らは暇だからさ」

富田 働いてくださいよ」

平井 働くよ、働くけどさ、何か一つでも楽しみがないとさ」

富田 売上盗むこと考えるのが楽しみなんですか」

平井 うん、そう」

富田 「……」

島の耳にもその会話が届いている。

ひっそり手帳にメモをしている島。

平井 そもそも、20年くらい前だったか、俺とよっちゃんで

始めたんだけど、よっちゃん支配人代理になった途端に

もう降りるって言い出してね、日和っちゃってさあ。し

かし20年考えても、これなら絶対っていう計画がなか

なか出てこないんだよなあ。バレちゃ意味がないだろ、

もちろん客を巻き込まないのが絶対条件だろ、あとさ、

従業員が誰も疑われずに済んだ方がいいだろ、レジから

金抜くとか単純なことじゃダメなんだよ。防犯カメラあ

るし、下山さんのチェックがあるし、なかなか実行でき

るような計画が出てこないからさ、これ考えるの、夜勤

の暇つぶしにちようどいいんだよ」

富田 じゃあ、永作くんも、加わってるんですか」

平井 そうそう、今はほら、よっちゃんがフロントやってないから、永作と俺でね」

富田 永作くん、本気にしてるんじゃないですか」

平井 そんなことないだろ」

富田 でも、時々挙動不審ですから」

平井 もともと挙動不審だから」

富田 遅います。あれは絶対にその計画の下見だったんだ」

平井 あれって」

富田 「二週間ほど前、」

照明が変わり、一週間前の夜のロビーになる。

富田 永作くんと夜勤で一緒だったんですが、僕が先に仮眠休憩をもらって、空いてる客室に上がって行ったあと、」

明かりを落としたロビーに永作が来て、天井のあちこちを見上げ、手を振ったり、背伸びをしたりしている。

富田 喉が渴いたんで、ロビーに降りてきたら、永作くんが一人で何か怪しげな動きをしていました。最初は、天井の水漏れをチェックしてるのかと思ったんです。でも、そのうち、防犯カメラの角度を確認してるんだと気が付きました」

永作、天井に数カ所設置された防犯カメラの角度を確かめて、図面らしきもの書き入れ、

平井 図面まで」

満足気に頷いて、図面を持ってバックヤードに引っ込む。明かりが元通りになる。

今日のロビー。

富田 永作くんが休憩に入ってから、こっそり見てみたら、このホテルの精密な図面でした」

平井 本格的だなあ。まさか、本気ってことはないと思うけど」

富田 それで」

平井 ん？」

富田 「どんな計画なんです」

平井 「お、なに、富田くんも参加する？」

平井、嬉しそうに富田をバックヤードに引っぱって行く。
ロビーには、それを渋顔で見送った畠が一人残る。
カウンターに人がいないことを確かめるように覗きこみながら、タイ人男性客が戻ってくる。

畠 「あ」

タイ人、畠に気がついてほっとしたように嬉しそうな顔。

畠 「おかえりなさいませ」

嬉しそうに立ち上がった畠、直立不動で深々と頭を下げる。

タイ人 「人差し指を口元に当てて」 しーっ・・・」

バックヤードを気にかけている。

畠 「お泊りのお客さまですよ。何号室でしょうか」

小走りにカウンターへ行き、鍵を出そうとして、

畠 「あ、お客さま、お部屋の鍵をお持ちになったままお出かけになられてますよね」

タイ人、入り口から中には入って来ずに畠を手招きしている。

畠 「あ、えーと、ルームキー、えっと、ユー・ハブ、いや、

ユー、あー、ルームキー？」

タイ人 畠さん、ですよ？」

畠 「アーム・ソーリー、アイ・キャント・スピーク・タイ語」

タイ人 警視庁公安部係長の、畠さん」

畠山 「えっ」

タイ人 「ですよね？」

畠山、ぎよっとして身構えるが、タイ人が姿勢を正して

敬礼をすると、慌ててカウンターから出て、バックヤードを気にしながらタイ人に走り寄る。

畠山 「人差し指を口元に当てて」しーっ」

声に気づいた富田がバックヤードから出てくるが、畠山も横曲も気づかない。

横曲 「いよいよですか」

畠山 はい、いよいよです」

富田 畠さん」

畠山 「富田に気づかず」わたくしも緊張しています」

横曲 どんなご指示にも従う覚悟で参りました」

畠山 それでは、」

富田 畠さん」

畠山、富田の声に気づき、きよろきよろする。

富田 「ここです」

畠山 「富田を視て、横曲に」お客様、ルームキーをお願い致

します」

横曲 ほっ。(思わず敬礼してしまい、畠山に手を払われる)」

畠山 鍵っ」

横曲、あちこちまさぐって鍵を出そうとし、ロシア帽を落として、慌てて拾う。

富田 「横曲に）プリーズ・リーブ・ユア・ルームキー、ウエ
ン・ユー・ゴーアウト、エブリタイム」

横曲、鍵をカウンターに返し、にこにこする。

鍵を受け取った富田、少し考えて、鍵を横曲に差し出す。

富田 おかえりなさいませ」

横曲、戸惑うが「尹ンキュー、サンキュー」と鍵を受け取って、にこにこしながらエレベーターに。

富田 ごゆっくりどうぞ」

畠山 ごゆっくりどうぞ」

畠山、心配そうに横曲が去った方を見ているが、富田が自分を見ているのに気がついて、愛想笑いをする。

畠山 緊張しました。やっぱり接客は無理だな」

富田 知り合いですか」

畠山 え」

富田 今の、タイ人」

畠山 「いえ」

富田 付き合ってるんですか」

畠山 まさか」

富田 「いよいよ、って」

畠山 え」

富田 「いよいよ結ばれるんですね」

畠山 遅いますよ」

富田 自分が汚した部屋を自分で清掃するんだ」

畠山 あの、ほんとに違います」

富田 「……秘密は守ります」

畠山 そもそもタイ人なんて言葉が通じないし、あり得ないですから」

富田 「口惜しそうに」ボデイランゲージだ」

畠山 さっき、英語で話そうと思ったんですけど、さっぱり言葉が出てこないんですよ。大学出るまで何年も英語の勉強してるのに、実践じゃまるで役立ちませんね」

富田 「・・・語学なんて馬鹿馬鹿しいですよ」

畠山 ですよ。やっぱり喋れなきゃ」

富田 喋れても同じです」

畠山 英語のスキルがあれば、これから先どんな仕事でも役立ちますよ。オリンピックもあるし」

富田 「エスペラント語って、知ってますか」

畠山 えすぺ・・・なんですか、それ」

富田 天昔に、人工的に開発された言語で、世界語と呼ばれていたんですが、実際には、この言葉を母国語にしてる国は世界のどこにもないんですよ」

畠山 「へえ、知りませんでした」

富田 「この言葉を世界の公用語にしようという働きかけがあったて、一時期は日本にもエスペラントの語学学校があったりしましたけど、世界中でもせいぜい2000人くらいしか覚えた人がいなかったんですよ。通じる相手が絶対的に少ないし、広がらないまま、運動も尻すぼみにな

っていきました」

畠山 幻の言語なんですね」

富田 僕の、亡くなった父親が、日本エスペラント学会の研究
者だったんです」

畠山 すごいですね」

富田 実家、栃木なんですけど、当時、エスペラント語の講義
がある大学が東京にあったんで、僕も半ば強制的にそこ
に入れられて」

畠山 「じゃあ、富田さん、エスペラント語が話せるんですか」

富田 環境的に言えば、日本に2人しかいないネイティブ・ス
ピーカーですね」

畠山 もはや母国語なんですね」

富田 セ・ミ・エストウス・ピールド・ミ・ポーヴス・フルー
ギ・エン・ラ・チエーロン」

畠山 ざっぱりわかりません」

富田 「エスペラント語の詩の一節です。もしもわたしが鳥なら
ば、空に向かって飛んで行けるのに」

畠山 当たり前前のごとが、無駄にロマンチックに聞こえますね」

富田 はい。それだけです。なんの役にも立ちません」

畠山 でもバイリンガルじゃありませんか」

富田 通じない言葉を知ってても、意味ないですよ」

畠山 晋段から積極的に使ったらどうですか。もしかして、ここに来るお客さんの中に通じる人がいるかもしれないじゃないですか」

富田 最初は、僕もそう思ってたんです。エスペラント語を話せることだけが唯一の能力なんで、ホテル業界で働けば、それが活かせるんじゃないかと思いました」

畠山 「いないですか」

富田 「いないです」

いつの間にか平井がバックヤードのカーテンの陰から富永たちの様子をじっと見守っている。

畠山 でも、ほら、オリンピックになれば、世界語を使う人が」

富田 「いないと思います」

畠山 「いないですか」

富田 畠さん、オリンピックに何をそれほど期待してるんですか」

畠山 そうですよ。おかしいですよ。なんか、オリンピックのこと考えるとわくわくするんです。こんな国に、世

界中からたくさんの人が来るなんて、すごいなあって。わたし、実は旅行とかしたことなく、でも、自分が行かなくてもいろんな国の人に会えるんだから、すごいなあって。だからってわたしなんか何もできないんですけど、英語も喋れないし」

富田 来ないかもしれない」

畠 え？」

富田 誰も来ないかもしれない。こんな国だから」

畠 そんなことないですよ、みんな来ますよ、オリンピックには」

富田 チュ・ニ・イール・アル・ラ・キネーヨ？」

畠 え？」

富田 (赤面して俯く)」

平井、齒がゆくなって出てくると、

平井 映画に誘うなら日本語で言わなきゃ」

富田をつつく。

富田 えっ（驚いて平井を見る）

平井 まあ、いい感じなんじゃないの、働き者だしさ

富田 「紅い顔で俯く」

畠山 映画って？」

平井 じゃ、俺ちよっと飯食いに行ってくるから」

平井、ニヤニヤしながら出て行く。

畠山 「察してもじもじしてる」

富田 「……初めてです」

畠山 えっ」

富田 「エスぺラント語が通じたの、初めてです」

畠山 「……わたしにはわからなかったけど」

富山 「日本に2人しかいないネイティブ・スピーカーなのに」

畠山 あの、映画って」

富田 まさかこんなところで……」

畠山 ああ、（がっかりしている）……通じましたね」

富田 「こんなに身近なところで」

畠山 そうですよね」

富田 「しかも、平井さんだなんて」

畠山 すごいじゃないですか。やっぱり語学スキルあるのいいですよ、エスペラント語でも」

富田 「・・・より一層、どうでもいい能力のような気がしてきました」

畠山の携帯電話にメールが着信する。

内容を確認した畠山、ちよっと失礼します」と遠慮がちに言って、エレベーターに乗り込む。

富田 「視線はそらしているが、気配で畠山を見送って呟く」
一緒に映画を観に行きませんか」

二人連れの客・根岸と妻の昭子がくる。

富田 「いらっしやいませ」

根岸 すみません、遅くなりました。予約した根岸です」

富田 根岸和夫さまですね。ご予約ありがとうございます。お手数ですが、こちらの宿泊カードにお名前ご住所お電話番号をご記入ください」

根岸がカウンターでチェックイン手続きをしている間、妻の昭子はロビーをうろうろしている。

昭子 真知子、真知子」

浅間、島と顔を見合わせて、昭子に声をかける。

浅間 お待ち合わせですか」

昭子 ええ、娘が来ていると思うんですけど」

根岸 「昭子に）おい。いいからそこに座って待ってなさいよ」

昭子 だって、真知子が来てるんでしょう」

根岸 「手続きをしながら）真知子は遅くなるって言っただろう」

昭子 嘘よ。たぬきやホテルでね、って言ったもの、来てるわよ」

根岸 「富田に）娘が、あとから訪ねてくるんでね、部屋に通してもらっていいかな」

富田 がしこまりました」

根岸 それと、（昭子を顎で指して）アレが一人で外出しようとしたら、止めてくれないかな」

富田 「がしこまりました。お声をかけさせて戴きます」

根岸 「いや、声をかけるだけじゃなくて、なんとしても止めて欲しいんだ」

昭子、じっとしておられずにあちこちを覗いて 真知子、
真知子」と娘を探している。

根岸 認知症でね、外に出すと、どこに行っちゃうかわからな
いから」

富田 「がしこまりました」

根岸 悪いね。頼んだよ」

富田 全力でお止めします」

根岸 それとさ、」

富田 ほしい」

根岸 「きよろきよろしてバックヤードを覗く素振り）．．．い
や、うん、いや。じゃあ、お世話になります」

富田 ありがとうございます。ごゆっくりどうぞ」

根岸、昭子を促してエレベーターに乗り込む。
コンビニ袋を提げた永作が戻ってくる。

富田 またパチンコだ」

永作 「嬉しそうに）今日は出たよ。はい、これ」

永作、袋からココナツサブレの箱を出して富田に渡す。

富田 「不満を飲んで受け取る」

永作 どうせ今日も暇でしょ」

富田 忙しいですよ。それなりに（言いながら箱を開ける）」

永作 だって平井さん、パチンコ屋入ってたよ」

富田 飯って言ったのに（サブレを食べる）」

永作 「これで給料が良けりゃ天国なのになあ（サブレを食べる）」

カウンターのの中の富田も、カウンターの客が立たない側に肘をかけた永作も、サブレを食べながらのんびり話している。

富田 給料良かったらこんなに楽じゃないでしょう」

永作 俺さ、前、歌舞伎町のビジネスホテルで働いてたんだけ

どさ、ヤクザとヤク中とデリヘルばっかりだったよ」

富田 「ここだっていますよ」

永作 あいつら、どこにでもいるなあ」

富田 そういうわかりやすい人たちはいいですよ」

永作 まあ、そうだよね」

富田 普通のリーマンが一番たち悪いですから」

永作 言えてる」

富田 田張でシングルルームに泊まるリーマンで、必ずピンクチャンネル観るでしょ」

永作 観るよね。そんでさ、うちの機械がボロイから、必ず途中で止まっちゃうの」

富田 そのたんびに客室呼ばれるんですよ」

永作 ネットでいくらでもエロ動画が観られるこのご時世に、ピンクチャンネル観るかね」

富田 リーマンの一人客、必ずですよね」

永作 漏れなく観るね」

富田 あとマッサージ呼ぶでしょ」

永作 呼ぶね」

富田 指名で呼ぶでしょ、マッサージ」

永作 そうそう、明菜さん呼んでとかヒロコちゃん呼んでとか」

富田 デリヘルと勘違いしてますよね」

永作 「・・・あ、知らないんだ」

富田 何がですか」

永作 「マッサージってさ、自営業みたいなもんだからさ、マッサージさん個人の営業が勝負なわけよ」

富田 「・・・」

永作 「つまりさ、そういう裏メニューやってるマッサージさんもいるんだよね」

富田 裏メニュー・・・」

永作 客室途中でどんなサービスしてようが、俺らわかんないじゃない？ 指名で呼ばれる明菜さんなんか華奢な人だろ、ピアノしか弾けないみたいな手してるじゃん、あんな手ですごい按摩技術があるとは思えないもん」

富田 探みほぐす場所が違うんですね」

永作 多分ね」

富田 「マッサージ呼んだんだから、マッサージだけされてりゃいいんだ」

永作 「じょうがないよ。マッサージさんには死活問題だもん」

富田 「アーマンにはなりたくないです」

永作 だいいじよぶだよ、なれないから」

富田 「……」

永作 紹料あがんねーかなあ」

富田 永作さん、やる気ですか」

永作 やる気って？」

富田 伝統の、計画」

永作 あ、聞いた？」

富田 「真摯な顔で頷く」

永作 やりようがないじゃん。ミッション・インポッシブルだから、20年も計画立て続けてるんだし」

富田 思ったんですけど」

永作 天体さ、売上なんて多く見積もっても60万程度だろ、クビになったらすぐに干上がっちゃうしさ、吉川さんも案外薄情などこあるからね、通報するかもしれないじゃん。逮捕されたりしたら洒落になんないよ」

富田 もっと長期的に考えましょう」

永作 結局は暇つぶしに計画するだけってことだろ」

富田 思いついたんです」

永作 「へえ。なんか富田くんが乗るなんて、意外だけど」

富田 絶対に確実で、従業員が疑われず、客も安全で、吉川さんにも、経理の下山さんにも、バレない手があります」

照明が変わる。

ロビーのカウンターと反対側の一角に、ストックルーム。

畠山と横曲が密談している。

横曲 「ご苦労様です。わたくし、中野警察署警備課の横曲です」

畠山、びしっと姿勢を正し、敬礼しながら、

畠山 「ご苦労様です。警視庁公安部公安第二課第二公安捜査係長の畠山みどりです」

横曲 今回の任務で、畠山警部のご指示に従うよう任命されております」

畠山 タイ人だと思ってました」

横曲 「嬉しそう」 あ、タイ人に見えましたか」

畠山 見えました、見えました」

横曲 警部が潜入されていると聞いていましたから、どうやって接触しようかと考えまして」

畠山 巧みな変装ですね」

横曲 革マル派のクロサワがこのホテルで活動資金の提供者と

接触するという情報ですが」

畠山 東京オリンピックに向けて、過激派の活動が水面下で活発化していますから」

横曲 グロサワが資金調達係なんですね」

畠山 グロサワが東京に戻ってから公安部が尾行を開始しましたが、逃走されたので、面の割れていないわたしが送り込まれました」

横曲 グロサワは現れましたか」

畠山 「いえ、情報では405号室が接触地点ということなんです。すが、実は、ちよつと問題があつて」

横曲 問題というのは」

畠山 天井が」

横曲 天井？」

畠山 盗聴器が水没して」

横曲 葎マルめ！」

畠山 どにかく、現時点では接触地点不明、クロサワの人相も不明」

横曲 人相もですか」

畠山 黒沢は変装の名手です。性別や国籍も自在に変えるので身長と血液型でしか判別できません」

横曲 身長と血液型か」

畠山 身長は172センチ、血液型はAB型」

横曲 星座は」

畠山 呂うんですか？」

横曲 「舌打ちする）」

畠山 「このホテルには、チェックインするときは男でチェックアウトするときは女になっている背の高い不審者が出入りしているという情報があります」

横曲 確定ですね」

畠山 「しかし、今日の接触到どんな変装で現れるかわかりません」

横曲 情報が少なすぎますよ」

畠山 身長は誤魔化せません。背の高い人物に注意してください」

照明が変わって、ロビー。

富田と永作に浅間が加わって、サブレを食べながらのんびりした顔で、売上を盗み出す計画を立てている。

富田 酔っ払って、終電逃したりーマンが来る」

永作 「いらっしやいませ、お一人さまのご宿泊ですか」

富田 「二人でもいい」

永作 ツインルームご一泊でよろしいでしょうか」

富田 宿泊カードは通し番号があるからダミーを用意しておく」

永作 素泊まりで1万2千4百円になります」

富田 クレジットカードの場合は諦める」

永作 申し訳ありません、本日カードの売上を締めてしまいましたが、もしお持ちがございましたら現金でのお支払いをお願いできないでしょうか」

富田 「……」

永作 強引かな」

富田 値引きしましょう」

永作 現金払いでしたら1万2千円とさせて戴きますが」

浅間 お得だね」

永作 恐れいります、1万2千円ちょうど戴きます」

富田 客に渡す領収証はダミー」

永作 通し番号なくてバレないかな」

富田 プーマンは領収書を捨てる」

永作 がしこまりました。破棄させて戴きます。こちらがお部屋の鍵でございます」

富田 「リーマンは朝が早い」

永作 「かしまりました。6時半にモーニングコールですね。おやすみなさいませ。ごゆっくりどうぞ」

富田 「もちろんこれは売上に計上しない」

永作 「だけどさ、そこで普通に部屋通すとアウトした後には清掃しなきゃならないだろ。シーツの数とか、浴衣の数とかあるから、清掃した部屋の数は吉川さんが売上与照らし合わせてチェックしてるじゃん」

富田 「だから、浅間さんに仲間になってもらう」

永作 「そういうことか」

浅間 「えー、残業はしないよ」

富田 「二部屋のメイクに10分なら、10分早く出てくれればいい」

永作 「10分ならいいだろ」

富田 「他の従業員が出勤する前にメイクを終わらせる」

永作 「完璧じゃん」

浅間 「だから、シーツの数とかチェックしてるって」

永作 「それは誤魔化してくれなきゃ」

浅間 「まあ、一部屋分くらいなら誤魔化せるけどさ」

永作 「夜勤フロント二人とルーム一人の結託が絶対必要ってこ

とだ」

浅間 フロントは一人でもいいんじゃないの」

永作 「二人の時だと何かあった場合に疑われるよ」

富田 リーマン二人のツインで1万2千円」

浅間 そこ、別にリーマンじゃなくてもよくない」

永作 「1回やって一人4千円かあ」

浅間 「じゃぼいね」

富田 だからバレない」

永作 そりゃそうだけどさあ」

富田 売上ごっそり盗み出しても次の日には下山さんのチェックでバレる」

永作 だから、盆と正月が狙い目だって。下山さん、有給重ねて取るらしいからさ、平井さん、下山さんの休みの日程、さりげなく聞き出そうとして必死」

浅間 だけど下山さん戻ってきたらバレるじゃん」

永作 必死じゃさりげくないのにな」

浅間 平井さんのことだから、3日かそこら売上借りてパチンコで増やして返すとか考えてるんでしょ」

永作 その通り」

浅間 バカだね、すったらどうすんだらうね」

永作 ずったら逃げるんだよ」

浅間 だったら最初から盗んですぐ逃げりゃいいのに。3日もあればそこそこ遠くに行けるじゃん」

永作 結局、本気じゃないんだよ」

富田 僕は本気ですから」

浅間 「じよばいけどね」

富田 長期的に考えましょう」

永作 「30年は無理だよ」

富田 「10年」

永作 「10年でも長いけどなあ」

富田 酔っ払ったリーマンがウォークインで来るのは火・水・

木の週3日」

浅間 週末とかじゃないんだ」

富田 翌日が休みだと朝まで飲んで始発に乗る」

永作 翌日の心配がなきゃわざわざホテル来ないよ」

富田 「二人4千円の実入りが週に3回あれば一ヶ月で4万8千円、一年で57万6千円、」

永作 「10年で5百76万円だ」

浅間 「10年も早出すんのかあ」

富田 商いは短く持ってコツコツ当てる」

永作 商いじゃないし盗みだし」

浅間 短く持ってないし10年長いし」

富田 中止しましょう」

永作 「うそうそうそ、やるから」

照明が変わると、客室。

備え付けの浴衣に着替えた根岸が室内の電話を使って娘と通話している。

根岸 「そうそう、わかるだろ、サンプラザのすぐ前のさ、ブロードウェイに抜ける路地があるから、うん、そうそう。

ああ、クラシックはもうなくなっちゃったんだよ、よく覚えてるなあ。そうだな、そうだったそうだった。いやあ、お父さんもこっち出てきたの30年ぶりだから、駅前が綺麗になってびっくりしたよ。それで、真知子がこっち着くの何時になるかね。ああそう。もうちよっと早く来られないかねえ。いや、だってほら、母さん目が離せないだろ、マッサージくらい呼びたいと思ってるからさ、そうだな、うん、悪いけど、できるだけ早く、うん、うん。そうなんだよ、家の中ならまだいいけどさ、

やっぱり外に出ると気が抜けないんだよ。こっち来たらさ、駅前にも、なんか楽器弾いて歌ってる若い子がいたんだけど、へえうまいもんだねえなんて話しながら通り過ぎて、あれっと思ったら、母さんいなくてさあ、慌てちゃったよ。そうなんだよ、あれ、やっぱり好きなんだよなあ、そうだろ、うんうん、楽器弾いてる子に抱きついちゃったもんだから、殴られそうになってたよ。ありやあどっかにグループサウンズの記憶が残ってるんだろうなあ。そうだよ、ここだってほら、そっちのあれで、母さんが馴染みだっけ言うから」

と、話している間に、妻の昭子は浴衣のまま部屋を抜け出して行くが、根岸は気づかない。

昭子を追って照明が変わり、ロビー。

昭子、カウンターに来るが誰もいない。

昭子
すみません」

じっと待つ昭子。

誰も出てこない。

昭子 すみません」

昭子、カウンターのベルに気づいて、ちんちんちんちん
煩く鳴らす。

エレベーターから吉川が降りてきて、ベルに気づき、急
ぎ足で来る。

吉川 はいはいはいはい」

昭子 「吉川を視るが、ベルは鳴らし続けている」

吉川 お待たせして申し訳ありません。お伺い致します」

昭子、ベルを鳴らすことを止められないまま、ようやく
吉川に反応する。

昭子 お忙しいところすみませんが、真知子をお願いします
(ちーん)」

吉川 真知子さん、ですか」

昭子 はい。根岸真知子を(ちーん)」

吉川 ええと、根岸真知子さまは、ご宿泊のお客様でしょうか」

吉川、台帳を確認するためにカウンターに入る。

昭子 「ちーん」 真知子です、根岸真知子」

吉川 ね、ぎし、まちこさま… (台帳をめくって探す)」

昭子 「ちーん」

吉川 「…本日ご宿泊のお客様には見当たらないようですが…
あ、根岸さまはおられますね。根岸透さま、昭子さま… (は
っとする)もしかして、アキちゃんじゃない？」

昭子 「ちーん」

吉川 アキちゃんだろ、久しぶりだなあ。俺だよ、俺、プア

吉川」

昭子 「ちーん」

吉川 懐かしいなあ。アキちゃんよくコンサートに来てくれた
よね、俺たち若林信康とプアマンズの」

昭子 「ちーん」

吉川 「こんなところで会うとはなあ。俺さ、今この支配人や
ってるんだよ、まだ表向きは代理だけど、もうすぐ死ぬ
からさ支配人、あ、元支配人がさ」

昭子 「ちーん」

吉川 「戸惑っている）やだなあ、アキちゃん俺のこと、思い出せない？ 忘れるはずないだろ、二人で過ごした中津川の夏を」

昭子 真知子はどこですか？（ちーん）」

吉川 「… あ、真知子さんって、もしかしてアキちゃんの娘さん？ 根岸透さんが、ご主人か」

昭子 真知子ー、真知子ー（ちーん、ちーん）」

吉川 「さすがに様子がおかしいと気づく）… アキちゃん」

昭子 「ちーん）」

昭子が鳴らすベルの音がリズムになって、吉川が眩くよ
うに歌いだす。

吉川 ぎっといつかは… きみのパパも… わかってくれる
さ…。」

エレベーターから血相を変えた根岸が降りてくる。

昭子を見つけて、心底ホッとした様子で、

根岸 昭子…！」

呼ばれた昭子、根岸にキッと向き直り、

昭子 「人差し指を口元に当てて」 しーっ！」

それから、おもむろに、再びベルでリズムを刻み始める。
吉川、ちらっと根岸を見て会釈をし、昭子を向くと深々
息を吸って、

吉川 「うしろをむいた……ふるえるかたを……だいてあげよう」

吉川が歌う 「だ、か、ら……」に重ねてキングトーンズ
の『グッドナイト・ベイビー』のメロディが流れてくる。
バックヤードから、エレベーターから、出演者全員が顔
を出して、サビの部分进行合唱。(まだ場面に登場してい
ない真知子と石原マッサージとパキスタン人も登場。)

「グッナイ、グンナイベイビー……なみだこらえて……
こんやは……このまま……おやすみグンナイ……
グッナイ、グンナイベイビー……なみだこらえて……

たのしい：．．あしたを：．．ゆめみてグンナイ：．．』

サビ部分を歌いながら、出演者たちは場面替え。

場面で未登場の出演者はサビ終わりで退場。

サビ終わりから音楽はBGMに。

ロビーのソファーに、平井・吉川・根岸・昭子。

静まった夜のロビーで打ち解けて話し込む四人。

エレベーター前に、畠山・横曲。

ロビーで談笑する四人の様子を伺って、ひそひそ声で相談している。

カウンター周辺に、富田・永作・浅間。

ダミーの宿泊カードをコピーして裁断し、通し番号のスタンプを押す作業を黙々とやっている。

3つの空間でのそれぞれの会話が同一線上に交錯する。

平井 知らなかったなあ、よっちゃんGSやってたんだ」

吉川 「GSじゃないよ、フォークね、流行ってたから」

永作 「1回やって4千円で10年だろ、モチベーション落ちるなあ」

根岸 昭子は、夢中だったらいいです」

横曲 あの背の高い男がクロサワですか」

富田 真面目に働いた方がましな稼ぎであることは否定しませ
ん」

畠山 「可能性があります」

浅間 普通さ、盗みとかってのは、真面目に働かなくてもいい
ようにやるもんだよね」

吉川 「アキちゃんくらいだよ、あんなに熱心にコンサート来て
くれてたの」

横曲 「ということは、あの従業員が資金提供者ですか」

永作 「逃げない・バレない・傷つけないが三原則じゃ、コツコ
ツやるしかないよなあ」

畠山 「……提供できる資金があるとは思えませんが、可能
性
はあります」

平井 「それにしても奇遇な再会だよなあ」

富田 「平井さんの計画は危険すぎる」

畠山 「このホテルでは、内部で売上を盗み出す計画が大っぴら
に立てられているんです」

吉川 「まさか、こんなところにアキちゃんが来るなんてさ」

浅間 「富田に）なんでまた急に乗り気になったのよ」

根岸 偶然じゃないと思うなあ。昭子、知ってたんじゃないんですか。吉川さんがここに勤めてること」

富田 罅が明かないから」

永作 「いやいやいや、拉致はやばいってマジ」

横曲 「ホテルぐるみってことですか」

浅間 「その拉致じゃないから」

平井 「よっちゃん、まさか、人の奥さんに」

畠山 「可能性はあります」

吉川 「ないないない」

浅間 「え、その拉致じゃないよね？」

横曲 「ホテルは隠れ蓑にもってこいですね」

根岸 「それはありませんね、わかってますよ」

吉川 「ないですよ、まず度胸がないもの」

横曲 「言われてみれば、あの女も挙動不審極まりない」

以下、3つの空間で3人がそれぞれ同時にぶちまける。

畠山 「そもそもこのホテルは怪しいんです。客室はあちこちが

ボロボロで稼働してないフロアが3フロアもあるし、従業員がいる方が不思議なくらい給料が安いし、それじゃあ皆この仕事が好きなのかと言えばホテルのくせにホスピタリティがまったくない。何より従業員が共通してエスペラント語を習得しているのが怪しい。日本に二人しかいないネイティブ・スピーカーが二人ともこのホテルにいるのは、暗号解読のためかもしれない」

根岸

「女房の認知症がひどくなったのは、この一年くらいでしたよ。もともとおっちょこちよいというか、今で言う天然なところがありますから、わたしも気がつかなかったんですよ。近所を徘徊しておまわりさんの世話になって初めてわかった。これまでどれだけ女房に目を向けてなかったのかと、いたく反省させられました」

富田

「このままじゃ人生の埒があかない。毎日毎日面白くもない仕事し続けたって嫁がもらえるわけでも家を買えるわけでもない。飯食って糞して寝るだけのアパートに毎月5万も6万も払い続けたってイケメンにもなれないしエリートにもなれない。死にたいと何度も思った。何度も

思うのに死ねやしない。だから死んだつもりで生きるしかない」

その間に入ってきた根岸の娘・真知子には誰も気づいておらず、しびれを切らした真知子が、カウンターのベルをちんちんちんちん煩く鳴らす。

皆が真知子に気づくが、根岸だけ気づかず話し続ける。

富田 「カウンターから）いらっしやいませ。お泊りでしょうか」

真知子 「ぼんやり顔を上げているが富田が見えていない」

根岸 「これまで構ってやらなかったツケだと覚悟したんですがね、わたし、肺をやられてましてね、とうとう医者にも入院しろって言われちゃった」

富田 「いらっしやいませ、お泊りでしょうか」

真知子 「スマホ＋ヘッドホンで根岸にも気づかない」

平井 「そりゃあ大変だ」

真知子 「……（貧乏揺すり）」

永作、仕方なくカウンターに入って富田と交代。

根岸 「娘は早くに嫁にやっちゃったからアテにできないし」

永作 「いらっしやいませ。お泊りでしょうか」

吉川 「じゃあ、アキちゃん、どうなっちゃうんです」

真知子 「あ、面会なんだけど」

根岸 「介護施設に入れることにしました」

吉川 「えっ、それじゃあ」

永作 「お泊りのお客様にご面会ですか」

真知子 「そ」

根岸 「ここで娘と落ち合って、娘が連れてってくれることにな
ってます」

吉川 「…………… そうだったんだ」

真知子 「なんだ、いるんじゃない」

真知子、根岸に気づくが、根岸は涙を拭いていて、真知
子に気づかない。

平井 「(吉川に) 介護施設って、高いんだろ」

真知子 「(カウンターの前から動かず) お父さん」

吉川 「そりゃあ、そこそこするんだろうけど」

ソファ―に腰掛けて居眠りをしていた昭子、目を覚まして真知子を見る。

根岸 「娘の旦那が出すって言うてくれてるから」

ううむ、とやりきれない気持ちで言葉なく唸り声をあげる平井と吉川。

真知子、昭子に手を振る。

昭子、訝しげに真知子を見て、

昭子 「お父さん、女の人が手振ってるわよ」

根岸 「んん？（真知子に気づいて）ああ、来たか」

根岸、嬉しそうに立ち上がって、手招きをする。

真知子 「荷物は？ 急いでるんだけど」

根岸 「そんなすぐには出られないよ。まあ、いいから、こっち

来て座りなさいよ。元気にやってたか」

真知子 「いや、まじ急いでんだけど」

昭子 「あらやだ。真知子がない」

真知子 「いるし」

昭子 「どこに行っちゃったのかしら」

真知子 「ここだし」

根岸 「……じゃあ、ちょっと荷物取ってくるから、ほら、母さんどこ来てなさい」

根岸、エレベーターに乗り込む。

真知子 「早くね」

昭子 「やだ、お父さんどこ行くの。ねえ、真知子も呼んでちょうだいよ」

真知子 「だからここにいるし」

昭子 「真知子に」ごめんなさいね。せっかく来てくれたのに。今、真知子も来ますから」

吉川 「昭子に」アキちゃん、マチコさん。ここにいるからね。よかったね。来てくれたよ。（真知子に）はじめまして。僕は昭子さんの古い友人で、ここの支配人をしている吉川といいます」

平井 「代理だから、代理」

昭子 「吉川に深々頭を下げる」申し訳ありません」

吉川 「よしてよ、何も申し訳なくないから」

昭子 「ほんとに、申し訳ありません」

吉川 「アキちゃん、よそうよ。何も悪いことしてないんだし」

昭子 「こんなに皆さんに気にかけて戴いているのに、真知子がいないんじゃないの。どこに行っちゃったんだろう、もう」

真知子 「……………（不貞腐れて黙っている）」

昭子 「真知子ー、真知子ー」

昭子、ロビーをうろついて真知子の名を呼び続ける。

と、何を思ったか富田が、昭子と一緒にになって、

富田 「マチコさん、まちこさん、どこにいますかー」

マチコを探す素振り。

昭子、驚いて富田を見る。

富田 「（昭子に）大丈夫です。一緒に探しましょう」

昭子 「（富田に膝につくほど頭を下げて）ありがとうございます
す」

二人、真知子を探してロビーを歩き回る。

みな、どうしていいのかわからないふうに戸惑って見ている。

やがて、富田が真知子の前に立ちはだかつて、

富田 「あっ、いました！ いましたよ！ マチコさん、ここに！」

昭子 「真知子！」

ぎょっとしている真知子の手を引いて昭子の前に引っ張りだす。

昭子 「いやあだ。この方は違うでしょ」

けらけら笑う昭子。

ショックを受けた真知子、富田を振り払うと

真知子 「外の、車で待ってますから」

小さく言って、逃げ出すように出て行く。

昭子 あーあ。やだわもう。(真知子の背に)ごめんなさいね」

がつくりする富田。

昭子 真知子はね、あんなふうじゃないの。真知子はもっとね、ちいーさくて、かわいらしくて、しっぽがふさふさーって」

浅間 「いぬ？」

永作 「犬だね」

横曲 「情報が錯綜してますね」

畠山 「これじゃあ接触者がわからない」

周囲でぼそぼそ言うが、当の昭子は、どっかりとソファーに腰をおろして、再び居眠りを始める。

吉川 「平井さん、俺たまんないよ」

平井 「うーん、たまんないなあ」

吉川 「どうにもできないもんなあ」

平井 「どうにもできんよなあ」

富田、心配そうな顔で昭子を見ていたが、不意にバックヤードに引っ込んでしまう。

吉川 「いつかは俺たちもこんなふうになっちゃうのかなあ」

浅間 「自分のこと？」

永作 「自分のことだね」

横曲 「しまった！」

畠山 「えっ」

横曲 「警部、監視対象は、今客室で一人です」

ぼそぼそしたやり取りの中で、慌ててエレベーターに飛び乗ろうとする横曲と畠山。

エレベーターのドアが開くと、ポストンバッグを提げた根岸と鉢合わせになる。

横曲 「おっと、失礼（落ち着いた笑顔）」

畠山と横曲、止む無くエレベーターに乗り込み、ひそひそ相談する。

横曲 「ザボタージュですよ。労働関係調整法6条、労働争議の、うーん、じゃなかったら、集会法とか道交法とかなんかそういうの、ないんですか」

畠山 「ありませんよ」

横曲 「身元確認だけでも取ればなあ」

畠山 「宿泊台帳が」

フロントの外線電話が鳴る。日常の雑音が戻ってくる。
ロビーでは、根岸が昭子を起こして、上着を着せ、皆に挨拶をしている。

根岸 「お騒がせして申し訳ありませんでした」

吉川 「僕、昭子さんのところ、面会に伺ってもいいですか」

根岸 「もちろんです。行ってやってください」

平井 「あれ、チェックアウトですか」

根岸 「いえ、わたしはもう遅いんで泊めてもらおうと思ってますから」

その間に、畠山がするりと出てきてさりげなくロビーを横切り、フロントのカウンターに近づいていく。

初めは、カウンターの外側から内側を覗き込むようにしているが、台帳が確認できると、なんとかしてそれを持ちだそうと、周囲を窺っている。

吉川 眞知子さん、車で待ってるって」

根岸 「ええ、タクシーで来てるって言ってましたから」

吉川 「永作くん、そこまで荷物を」

言われた永作、カウンターから出て根岸からポストンバッグを受け取り、根岸の先に立って出て行く。

畠山、その隙にカウンターの中に入り込む。

見届けてガッツポーズの横曲の携帯が、無音で着信する。

横曲、周囲を気にしてタイ語で電話に出るが、すぐにそこそと身を屈めて日本語対応になり、何やら黒い手帖を開いて、頷きながらメモを取る。

根岸に支えられて、昭子が出て行く。

吉川 「ありがとうございます。いってらっしゃいませ」

玄関先に立って、きちんと頭を下げ、送り出す吉川。

平井は、さっさとソファーに戻って新聞を広げ、口だけで「ありがとうございます」と適当な挨拶。

カウンターの内側でござと台帳を漁っている畠山。

浅間、それを注視しているが、畠山は気づかない。

客がくる。

パキ服を纏ったパキスタン人男性。

パキ人 「ちえっくいん」

カウンターの中の畠山、びくっと身を起こして、おどおどするが、パキ人は畠山に構わずパスポートを出し、

パキ人 「じゃふいーく・くわじゃざい・ほじゃ」

畠山 「い、い、いらっちゃいませ」

パキ人 「じゃふいーく・くわじゃざい・ほじゃ」

畠山 「チェックインですか」

パキ人 「ちえっくいんちえっくいん」

畠山、仕方なくチェックインの手続きを見よう見まねでやり始める。

その間に、根岸が戻ってくる。

ずっと外を見ていた吉川に、

根岸 吉川さん、僕の泊まってる部屋のピンクチャンネル、つ

かないみたいなんだけど」

吉川 「……（平井に）平井さん」

平井 「……（ソファァーから顔だけ向けて）はいはい」

吉川 「ピンクチャンネルだって」

平井 「（根岸に）あ、つかないですか」

根岸 うん、１０００円のテレビカード買ったんだけどさ」

平井 「じゃ、ちょっとお部屋に伺いますから」

根岸 「あ、あと吉川さん、悪いけどさ、マッサージも呼んでもらえるかな。えーと、石原マッサージの、明菜さんで」

平井と根岸、話ながらエレベーターに乗り込む。

吉川、虚しい気持ちで、ソファァーに置かれたままの新聞を片付けたりし、カウンターの外側からフロントの電話

でマッサージに電話をかける。

吉川

「お世話になっております、たぬきやホテルですが。マッサージお願いします。今日、明菜さんはいらっしやいますか。はい、お願いします。301号室、根岸さまで。よろしくどうぞ」

電話を切って、虚しい薄笑いを浮かべたまま、どっかりとソファーに座り込む。

音楽 ジョーン・バエス 『花はどこへ行った』が聞こえてきて、吉川、小さい声で歌い出す。

パキスタン人も歌いながら、手続きを終えてひとまずソファーに落ち着き、ノートパソコンを取り出して何やら歌いながら作業。

他の出演者たちも、芝居の動作を続けながら小さい声で鼻歌のように歌う。

控えめな歌声の中から、横曲が電話で話す声が立ち上がってくる。

横曲

「いやもう、何もかもが怪しいんです。もしかしたら、こ

こがアジトなんじゃないかと。ああ、はい。そうですか。
いえ、それは、まだ確定できていません。絞り込んだ対
象がいましたが、これという接触がないままで」

歌声の中、出入り業者の石原マッサージが来る。

石原 「おつかれさまです」

フロントにチケットのようなものを置いて、エレベータ
ーに向かう。

平井がエレベーターから降りてきて、

平井 「ああ、お疲れ様です」

入れ違いにエレベーターに乗り込む石原マッサージ。

平井は、バックヤードに入る。

横曲 「ええ、はい、身長172センチ、血液型はAB、星座は

不明。いえ、占いません。はい、あっ、しまった……特
徴に該当する監視対象者は、今、客室に戻ってピンクチ

チャンネルを鑑賞しながら、……は？、はい。はい……

え

えっ、クロサワは、女！」

畠山、チェックインカウンターの中から横曲の話を聞いていたが、「クロサワは女」と聞いて「！」となったとき、

客がくる。畠山、反射的に、

畠山 「いらっしやいませ」

女客 「翠川ポンナパで予約してるんですけど」

畠山 「ほ？」

女客 「ポンナパ、翠川ポンナパ」

横曲 「電話を耳に当てたまま、かき消すような大声で」身長

1

72センチの女なんですね？」

女客、横曲の声に「！！」となる。

畠山 「それでは、こちらにお名前ご住所お電話番号を、」

横曲 「くーろーさーわあーっ!!!」

嬉々としてチェックイン手続きを進める畠山の目前で、逃げ出す女客。

クロサワの名を叫び、追って飛び出して行く横曲。

畠山 「お客様！鍵を！」

叫びながらカウンターを飛び出すが、はっと状況に気づいた畠山、

畠山 「(地団駄を踏んで) 違うよ、鍵じゃないよ、革マルだ

よ!..... 向いてないな、わたし」

がっくりと項垂れる。

カウンターが無になると、浅間がそっと滑りこむ。

ちょうど音楽が消えたところに、チーンとレジを開ける

音がするが、誰も注意を払わない。

バックヤードから富田が出てくる。

レジの金をエプロンのポケットに詰め込んでいた浅間、
びくっとするが、

富田 「巡回行ってきます」

富田は気にも留めず、心ここにあらずの様子でチェック
ボードを取って、エレベーターに向かう。

浅間、がしがし現金を掴み取って、カウンターの外側で
そわそわ待ち構えている永作にも渡している。

平井が、バックヤードから出てきて、吉川のいるソファ
ーに並んで腰を下ろす。

平井 「予約入ったってさ」

吉川 「…ん？」

平井 「電話予約」

吉川 「ああ、そう」

平井 「この先一年間ずっと、毎週日曜日の夜、喫煙シングルル
ームで」

吉川 「(煩そうに) なんだよ」

平井 「真知子さんだよ。嫁にあって、藤田真知子さんだ」

吉川 「え」

平井 「毎週、面会に行くことにしたみたいよ。帰りが遅くなるからこっち泊まって朝早くの電車で、そのまま仕事行きたいんだって」

吉川 「・・・そっか」

平井 「意外と孝行娘だな」

吉川 「・・・そうだね」

エレベーターから石原マッサージが降りてくる。
歩きながらほつれた髪の毛を直して、

石原 「ふう」

妙に色っぽいため息をつく。

平井 「あ、お疲れ様でしたー」

石原 「ありがとうございますー」

石原 マッサージ、帰って行く。

永作 「あのー……」

永作が、おずおずと平井たちのところに来る。

平井 「ん、あ、ああ。ごめんごめん、今日早上がりだっけ」

永作 「いいすか、すみません」

平井 「ああ、おつかれさまー」

永作 「おつかれさまです、お先に失礼しまーす」

浅間 「わたしも帰りまーす」

平井 「ああ、おつかれしたー」

浅間、外したエプロンを丸めて持って、弾む足取りで出て行く。

永作も急いで後を追おうとするが、玄関前でふと立ち止まり、何か言おうとしてやめ、去って行く。

呆然としている畠山の携帯がバイブレーターの振動で鳴り出す。

畠山、出ない。

吉川と平井、ちらっと気にするが、構わない。

が、パキスタン人が気にする。

パキ人 「電話出たらいいんじゃないの、ね、電話さ」

もごもごともった訛りの強い早口の日本語が、皆には
パキスタンの言葉に聞こえている。

畠山 「え、あ、ソーリー、（平井と吉川に小声で）なんて言っ
て

るんですか」

平井 「ざあ」

吉川 「パキスタンて何語だっけ」

パキ人 「いや俺はソーリーって英語わからないけどもあ英語か
な英語だよないや電話出たらいいんじゃないのかな
て思って別に煩いとかそういう文句言ってるわけじゃ
なくてただ気になるって言うか出ないのかなと思って
まあ色々事情があるのかもしれないけど俺はわかん
いからさ、うん」

畠山 「今、うん、って聞こえましたね」

吉川 「聞こえたね」

平井 「聞こえたよな」

パキ人 「ほらほら早く出ないと電話切れちゃうんじゃないの気にしなくていいからさ出たほうがいいよなんか大事な用事かもしれないんだから田舎のお母さんが倒れたとか宝くじで百万円あたったとかあ宝くじあたっても電話はかかってこないかもしれないけどね、うん」

畠山・平井・吉川、にこにこしながら 「うんうんうん」と口々に答えている。

パキ人、だんだん興奮して、震え続けている電話を指さしながらより早口になってしゃべり続ける。

パキ人 「だから俺はあんたのこと何も知らないし事情があるのかもわからんけれどもあんたの電話が鳴ってることはわかるんだよね馬鹿じゃないんだから俺だってさだからもしあんたがこういうところで電話にでるのはマナー違反だと思ってるなら気にしないでいいしそういうことはお互い様っていうか俺だっていつこういうところで他人に迷惑かけるかわからないわけだしや別に迷惑なことをしようと思ってるわけじゃないよそうじゃないけどもそういうこともありうるわけだから

ら、…」.

ここにこしながら「うんうんうんうん」と答える三人ともはや何を喋っているのか聞き取れないほど興奮しているパキ人がしゃべり続ける中、暗転。

たぬきやホテルのロビー、朝。

カウンターに富田と平井。

ぼそぼそと小声でエスペラント語で会話をして、にやにやくすくすしている。

平井 「リ・ジュス・フィーリス・ラ・ラポーロン…」（ひっひっひっ
っ

ひ）」

富田 「アイ・ヴォーロス・レヴェーニ…」（ひっひっひ）」

ソファーに吉川。

吉川は何やらの書類を手にしている。

吉川 「平井さん、ちょっとこれ見て」

書類をかざして、平井を呼ぶ。

平井 「ああ？」

平井、吉川から書類を受け取り、目を走らせる。

平井 「なになに。えー、2016年夏季オリンピック競技大会におけるホテル利用に関する保証書かっこ立候補ファイルかっこことじ、本保証書は特定非営利活動法人、東京オリンピック招致委員会以下甲と、たぬきやホテル以下乙との間で作成し締結するものである」

富田 「オリンピックですか」

平井 「2016年夏季オリンピック競技大会の開催のために、

東京都が立候補する手続きの一つとして、オリンピック招致委員会は、国際オリンピック委員会に対し、ホテルの客室及びそれに関連するその他のサービスの提供を保証しなければならない。ええーと、算定式、2016年大会時の料金イコールAかけるカッコ1足すBカッコトジかけるカッコ1足すCカッコトジで、2016年までの消費者物価指数上昇率の予測値が2.5パーセント、オリンピック割増率5パーセント、へえーえ。こんな

こと契約させられるんだ」

吉川 「まあ、お前ら調子こいてぼったくるなよ、ってことなんだと思うけど」

平井 「なんだよ。オリンピックくるときにふっかけるしかないじゃない、割増率5パーセントはないよ」

吉川 「そういう取り決めなんだってさ」

平井 「あーあ、オリンピックかあ」

経理部の下山が出勤してくる。

下山 「おはようございます」

富田 「おはようございます」

吉川 「おはよう」

平井 「あ、ねえ、下山さん、年末年始の予定、決まった？」

下山 「なんですか、平井さん、こないだっから、そればかり
気にして。まだ決めてませんよ。ていうか、休みなんか
取れなくなっちゃうかもしれないですから」

平井 「なによ、正月くらい1週間くらいのおんびり休んでさ、温
泉でもハワイでも行ってきたらいいじゃない」

下山 「平井を無視して、険しい顔で」吉川さん、ちょっと」

下山、吉川を呼んで、エレベーター前でこそこそ話しながらエレベーターに乗り込む。

吉川 「えっ、売上が」

下山 「じーっ」

平井と富田、素知らぬ顔だが、

平井 「(ひそひそと) 永作くん、今日来るかなあ」

富田 「(ひそひそと) 来ないでしょう、さすがに」

平井 浅間さんも」

富田 今頃二人で高飛びですよ、温泉とかハワイとか」

平井 だよなあ」

富田 今月、俺の給料、ちゃんと出るかなあ」

畠山が出勤して来る。

畠山 「おはようございます」

平井 「おはよう」

富田 「おはようございます」

畠山、小走りに平井のところへ行き、

畠山 「富田を意識して小声で」なんでしたっけ、ミ、ミ……」

平井 「に」

畠山 「に？」

平井 「に、いーる」

畠山 「に、いーる」

平井 「ぎねーよ」

畠山 「ぎねーよ、に、いーる、きねーよ……」

畠山、平井に教わった短いエスペラント語を口の中で小さく繰り返して、富田に声をかける。

畠山 「あの、」

平井 「あ、ちょ、ちょっと待って、ちょっと、ちょっと……」

平井、畠山を引き止め、呼び戻して、

平井 「ちび？」

畠山 「ええー」

平井 「ほんとだって、こっこのほうが覚えやすいし、おんなじ意味だけど、なんていうかな、もうちょっと特別な気持ちがある場合に使うんだよね」

畠山 「ちび？、って？」

平井 「お、うまいね、ネイティブみたい」

畠山 「……ちび？」

平井 「そうそう」

畠山、嬉しそうに頷いて、富田のところへ行く。

畠山 「富田に」ちび？」

富田 「ぎろっと睨む」……」

畠山 「ちび？」

富田 「…平井さん」

畠山 「ちび？」

富田 何回も言わなくてもいいですから」

畠山 「ちび？」

平井、素知らぬ顔でへらへら笑ってる。

フロントの外線電話が鳴る。

平井が取る。

平井 「ありがとうございます。たぬきやホテルでございます」

溶暗。

